
俺の世界：さらに一万年後

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の世界・さらに一万年後

【Zコード】

Z75400

【作者名】

たまご

【あらすじ】

俺の世界2シリーズ目です。ある日神谷伊予は帰り道で不気味に光る魔法陣を発見！？しかもそれに触れてしまつた！？勇者になる話。主人公神谷伊予は自分の世界に帰れないということで、とりあえず魔王（笑）とやらを倒す旅に出る。伊予がシンヤからもらった能力は ICBM 敵を駆逐します。

好奇心は日常を殺す～魔法陣とか～

その日、神谷伊予（16歳）はいつも通り学校で授業を受けいつも通りに下校していた。・・・不思議に光る魔法陣を見つけるまでは。そしてそれに触れどこかに引きずり込まれるまでは。

「ハハ、ビリビリ？」

気がつくと真っ白な空間にいた

「お、気がついたか？」

田の前には不思議な男の人。若そつなにとても威厳を感じる。いや、威厳といつより恐怖？

「あなたは誰？」

「俺か？俺は今からお前が行く世界の主神だ。名前は鉄神矢。お前が神谷伊予だな」

「うん・・・そうだけど・・・。なんで私こんなところにいるの？で、今から行く世界って？」

「それについてはいまから説明する。まず俺の世界の人間が勇者召喚の儀式をした。普通なら成功しないのだが、お前がいた世界を管理しているクソ神がおもしろそうだからという理由で、お前が召喚の魔法陣を発見してそれに触れるようにした。それによってここにお前は飛ばされてきた。以上、わかったか？」

「つまり儀式をした人間と私の世界の神が原因ってこと?」

「やっぱ。物分かりいいな、お前。それで俺としては元の世界に戻してやりたいんだけど、あの神の方が位が高いから無理だ。という感じで、なんか能力でもあげようかなと思つたんだが、いる?」

「……」

なんかよくわからないけど、とりあえずもらえるものせもらひねつ。ないよりはましだ。

「じゃあ・・・HUBM（大陸間弾道ミサイル）威力・大きさ調整可で行」ひ

「ちょっと…それってほほ最強じゃ！…あ～でも…

「科学とかざねぐらに発達してるので？」

それによつてはまったく無駄かも知れないし。

「ほとんど発達してないよ。魔法が発達していぬが」

よし。使える。

「じゃあもう飛ばしてもいいか？」

「うん」

「じゃあまたな」

またなとまじりこじかを物へせりせこせとゆこながりゆく
の意識は落ちていった。

好奇心は日常を殺す～魔法陣とか～（後書き）

1シリーズの方を更新するほうがいいので更新は不定期です。

実はそんなお呼びでなかつた勇者ひきと（前書き）

びみょーじ適आです。

実はそんなに呼びではなかつた勇者ちゅん

目が覚めると私は魔法陣の上に立つていた。目の前には銀髪碧眼のきれいな巫女さんがいた。

「よつじんわ、勇者様。私はカグラと申します。」

「私は神谷伊予。この世界風にいうならイヨ・カミヤだね。話は神様から聞いてるよ。私になにをしてほしいのかな?」

「はい、魔王を討伐してほしいのです。」

「その、魔王、とは?」

「魔王は魔物の最上位の君臨する個体で人以上の知識と並はずれた、身体能力を持つています。何百年かに一度現れ災厄をまき散らし、そのたびに勇者と呼ばれる人が現れ倒したといわれています。」

「ちょっと待つて。いままではこの世界の人が倒してたんでしょ? 神様が今まで勇者召喚の儀式が成功したことないって言つてたし。なんで勇者召喚の儀式を行つたの?」

「その前にさつきからおっしゃっている神様とは誰のことですか?」

「シンヤ・クロガネって名乗つてたけど・・・。」

「聞いたことないですね・・・。古い文献にあるか調べてみましょう。それより何故勇者召喚の儀式を行つたかですが、簡単にいえば恒例というか慣習みたいなものです。」

「つまりそんなわけわかんない」と呼び出されたってわけ?」

「ええ、まあそういうことになりますね。」

「ふざけんなよ……」

「それよつこれからイヨ様の待遇ですが……まあ自由にしてください。」

「なにそのトキトー……」

「とつあえず王様には会つていただきますが。」

1時間後。カグラから色々と説明を受け、王様の前、いや御前にいた。

「そなたが勇者か?私はスライデン王国国王、ジョージ・ファン・レステ・ラ・スライデンだ。」

「私はイヨ・カミヤとつものです。」

「单刀直入だがそなたに魔王を討伐しておらいたい。魔王率いる魔物の軍勢が最近王国内を荒らしているのだ。」

「別にいいですよ。」

「 そ、う、か！ ！ あ、り、が、と、う、！ ！ な、ら、す、ぐ、に、旅、立、つ、て、ほ、し、い、。 金、貨、10
0、枚、を、持、た、せ、よ、う、。 」

「 あ、り、が、と、う、！ じ、ぞ、こ、ま、す、。 」

カ、グ、ラ、の、話、か、ら、考、え、る、に、銅、貨、が、100、円、 青、銅、貨、が、500、円、 銀、
貨、が、5000、円、 金、貨、が、1、万、円、 王、様、 こ、ん、な、小、娘、に、100、万、円、も
持、た、せ、て、大、丈、夫、？

そ、の、日、の、う、ち、に、城、を、出、た、。 い、や、 追、い、出、さ、れ、た、？

「さあそく仲間が増えました～つて神様と女神様！？」

私は城を出た（追に出されたともいう）後、城下の街に行きました。魔王を倒す。なら、いろいろと旅をしたり魔物とかを倒さないといけない。といつことで、武器とか防具とか食糧とかを買いに行きました。・・・さうはこつてもどこへ行けばいいのか全くわかりません。どうしよう。さう歎んでいたら、長い白髪に燃えるような紅い瞳をしたきれいなお姉さんが話しかけてきました。

「あなたが神谷伊予さんね？」

「はい。さうですけど、なんで？」

「」の人は何故私の事を知っているんでしょう。

「とにかく、私に着いて来てくれますか？」

良くわかりませんがとりあえずついて行くことにしました。

謎のお姉さんに着いて行くと、古びた鍛冶屋みたいなところに着きました。

「みたいな、ではなく鍛冶屋よ。」

「ソラ、お帰り。お使い」お姉さん。

中から声がして誰か出てきました。その青年はなんていうか・・・

「神様！？」

あの真っ白な空間にいた神様でした。

「いやーあの後お前をずっと見てたんだが、かわいそうになつてき
たといつかなんていうか・・・」

「あのーそちらの方は?」

「ん?ああ、女神だ。ていうか俺の嫁」

「ソランザムです。よろしくお願ひします、伊予さん。」

「よろしく。・・・ところで神様が私に何の用ですか?」

「ちょっとお前を見ているとかわいそうになつてきただんで、俺らも
魔王を倒す旅に着いて行こうかと。」

「一人旅はさびしいだろ?あまり世界に干渉はしないがサポートぐら
いはできるから。」

なんていうか・・・この神様いい人だ!!

「あの」

「なんだ?」

「ありがとうございます……」

「いや、別にいいって。もとまことにえればあの「ソノ神が悪いんだし。」

「とりあえず武器を造つてあげるからってそういういえばあげた能力、もつ使つてみた?」

「いえ、まだです。使い時がなくて……。」

「そりゃそりゃだらうな(笑)……じゃあ武器作らうか。どんなのがいい?」

「日本刀つて作れますか?」

「うう見えても私は剣道少女だったのである。ちなみに初段。

「作れるよ。君より未来の人だし。俺。」

「それつてビデオ?……?」

「この世界を造つた神様なら私よりも年といぐるんじやあ……

「すべての時空が時間通りになつているわけじゃないわ。」

「よくわかんないや……。」

「うへん……。よし、決めた!――刀流つてできるよな?」

「はい、できますけど……なんでしつてるんですか?」

誰にも言わずに練習したのに・・・

「神様だから。 ふんっ！！」

神様の手が光りだしました。そして光がおさまると・・・一振りの美しい日本刀がありました。

「できた・・・。名前をつけてあげて。そしたら君のものになるか」ともきれいです。どんな名前にしようっ・・・。やうだつ！！

「では・・・長いほうを美斬、短いほうを美鈴のします。」

由来は美斬は美しく斬る、美鈴は鈴のよつと美しく感じ。の子達の持ち主としてふさわしくならなか。

「じゃあ店の外に出て。」

「わかりました。」

店の外に出ると「はいは入つてきたときと違う何もない荒地でした。」

「修行しようか。じゃあソーハツへ！」

「わかりました。シンヤさん。では、修行をしまじゅう。」

「うひーンラさんとの修行が始まった。」

せっそく仲間が増えました～つて神様と女神様ー～～（後書き）

感想を書いてくれると嬉しいです。

ソラさんの教えてくれる剣技は実践的なもので、今までクラブなどでがんばってたことはほとんど役に立ちませんでした。だから、ほとんど最初から。基礎の基礎からやりました。・・・それにしてもソラさんは何故刀の使い方を知っているのでしょうか？神様がこの世界に刀は無いといったのに。

剣の訓練が終わった後は、神様との魔法の訓練です。訓練といっても神様が調べたところ、私は魔法の無い世界から來たので魔力を持つていません。それで、神様は魔法は使えないことはこの世界では圧倒的に不利なので、魔法を使ってくる敵と戦う訓練をスルゾー！！といいだしました。

「刀に魔法無効化能力を付与しておくれ、魔法が無い世界から來たから魔法がどんなものか知らないだろ？だから最初は見てろ。後から色々やってもらいうから。」

「はい。」

「じゃあ、まずは・・・『ファイア・ボール』」

神様が唱えると、バスケットボールぐらいの火の球が空中に出現しました。なるほどこれが魔法ですか

- ・・・・・すごいです。私は使えないなんて残念です。

「凄腕の魔術士や高位の魔獣は魔力を大量に持っているから、同じ魔法でもほら・・・『ファイア・ボール』」

今度はとてもなく大きな、小さな太陽のような火の球が現れました。

「魔力の量次第で大きさや質が変わってくる。だから、魔法は使い勝手がいいんだが・・・伊予に教えてもしちがないか。」

神様は火の球を消しました。

「じゃあ、刀だして。」

「はい。」

神様は私の差し出した美斬と美鈴に触れる一瞬光つたような気がしました。

「魔法を無効化できるようにしたから。じゃあ構えて。」

よくわかりませんが二つとも構えます。すると・・・

「よけるなよ『ファイア・ボール』」

神様がいきなり火の球を撃つてきました。とっさに避けます。

「危ないじゃないですか！・・・いきなり何をするんですか！・・・」

「避けるなつたるーが。何のために刀を構える時間をやつたと思ってんだ。」

刀を構える時間をやつた？それつてつまり・・・

「あの火の球をこれで斬れと？」

「やうだ。それなら斬れるから。『ファイア・ボール』」

また神様が撃つてきました。しかも今度はさつきより大きいです。

「セニヤツーーー。」

美斬で真つ二つに斬ります。すぱっと二つに割れて後方に飛んで行きました。

「その調子その調子。さすがソラの弟子。」

神様のほめられました。えへへ#

「じゃあどんどんこつてみよか」

今度は何も言わずに火の球を撃つてきました。いろんな方向から。

「やあーーーとうつーーーせニヤツーーーはつーーー。」

左右と正面からきたのは斬れましたが上から来たのは避けませんでした。

「うん。それでいいよ。無理に斬るうとして怪我するより避けたほうがいいから。しつかり見極めるよ。」

「の後、ずっとこの『訓練』をしました。ボロボロになつてソラさんになじめられるまで。

世間つて以外と狭いよね～（前書き）

更新遅れています。

世間つて以外と狭いよね

今日は『ICBM』の使い方を教えてもらいます。

「使い方なんて簡単簡単。座標を指定して、威力と大きさ、それから数を指定。そして解き放つ！！全部イメージだから。とりあえず頭出して。」

よくわかりませんが神様に言われたようにします。神様が私の頭に手を触れます。すると、いきなり頭が割れるように痛みを伴つて数々の情報が流れ込んできました。

「頭の中に座標指定用のプログラムを無意識領域に送つておいたから、何処の落とすとかイメージしたら無意識に座標を指定できるから、がんばれ。まずは、威力を調整せずにそのまま撃つてごらん?」

神様の話は難しいです。でもなんだかわかつたような気がします。
座標・・・100キロぐらい先。大きさ・・・適當。威力・・・適當。
当。発射！！

巨大なミサイルが空中に出現＆飛んで行きました。

ちゅうひーん！――――――――――――――――

！――――――――――――――――――――――

・・・巨大なクレーターができました。

「わお。すういすうい。じゃあこれを威力調節して俺に撃つでござらん？」

・・・さすがに神様も死んじゃうんじゃあ・・・？

「大丈夫、死んだりしないから。」

なんかすごい安心感です。惚れてしまいそう。・・・はつ――いけないいけない。集中集中。

着地点・・・神様 威力・・・爆発しない 大きさ・・・鉛筆ぐら
い 発射！！

しゅうおおおおおおお――！

花火のようなものが空中から出現＆神様に向かつて飛んでいきます。

ぱふつ

神様に当たると//サイルは消えてしましました。
見て笑っています。神様はこちらを

「上出来、上出来。最初っから使いこなすなんて。さすが俺の姪。」

「めめめ、姪つてどうこい」とですか！？」「

「伊予の母親は卑弥呼だろ？あいつは俺の妹なの。」

「で、でも、おじさんは確かに国外を奥さんといっしょに放浪してゐつて……。」

「いい日本じゃあないし。奥さんはソラ。だからソラは母子のおばさんだな。」

「ひどいですね、シンヤさん。私まだまだ若いですよ？」

「1万年以上生きてる癖に何いつてる（笑）……とにかくあのクソ神が俺に素質があるとか何とかいつたから血の繋がってる伊予にも素質があるんだる。」

驚き桃の木　　です！…そういえばこの世界の事をお母さんは知つているんでしょう？

「知つてるよ。あつちの世界に戻った時に一通り話した。で、伊予のことも話した。心配してたぞ？変なことに首つっこまないか。」

・・・よけいなお世話です！…というか写真でみた姿とまったく違うんですけど！…写真の中のおじさんはとてもきれいで女人の人みたいでした。髪も長かったし。

「それは俺が魔法をかけてるから。じゃあ一回解いてやる。この世界で俺の本当の姿をしつてるのはソラだけだからかなり希少価値があるぞ？」

そういうて神様もといおじさんが指パッチンをすると、その身体が輝きだし、そして光がおさると・

・・・・・・・・・・・・・・美少女なおじさんがいました。

前回のあいすじ（担当はソラ）ひさしぶりにシンヤさんの本来の姿をみました。いつもそのままでいいのに。

神様達と修行を初めて一ヶ月経ったころ。2人から卒業証書をもらいました。賞状には手書きで一般人技能検定1級合格おめでとう、と書かれていました。

「合格したところで旅にでるか。」

「魔王を倒しに行くんですか？」

「うんにゃ。あのクソ神が言つては魔王が持つてる指輪にはめてる宝石で元の世界に戻れるようにしたつて言つてたから、倒さなくとも交渉すればいい。だからとりあえず魔王に会いに行く。」

「転移魔法は使えないんですか？」

「伊予は転移できない設定になつてた。」

「・・・残念」

「まあ、この世界を回つてみたらどうだ？俺の作ったこの世界を」

次の日。神様が旅をするには金が必要だ！…といいだしたので、神様達とギルドに行くことになりました。

「すみません、この子の登録したいんだけど。」

「はーい。じゃああちらの紙に必要事項を書いてください。書き終えたら、持つて来てください。」

私が紙にいろいろ（年齢とか性別とか）書いている間に神様達が依頼を受けます。

「SSのシンヤとソラだけ。護衛系の依頼無い？3人で受けれる奴。」

「はい。少々お待ちを。・・・・・ありました。Bランクでエルフの国までの荷物の護衛というのがありますね。」

「じゃあそれ。俺とソラともう一人は今から登録する。」

「わかりました。」

皆さん私を待つてているようです。いやがねば。職業つてどうすればいいんでしょうか。神様に小声で相談します。

『職業つてどうすればいいんですか？』

『勇者でいいだろ』

職業欄に勇者と書いて提出します。

『ちなみに2人はなんて書いてるんですか?』

『『神』』

・・・・・神様の受けた依頼は私レベルでも簡単な奴だそうです。襲いかかってくるのは盗賊ぐらい。修行で人を殺すことに馴らされたのでたぶん大儀じょうぶです。最初は気持ち悪くて吐きそうになりましたが、もう大丈夫です。

「そういえば、エルフって何ですか?」

「ファンタジー小説とか読んだこと無いのか?」

「はい。興味なかったので。」

「じゃあ説明するか。といつても直接見た方が早いんだがな。」

なんだかんだでうだうだ言いながら神様は説明してくれました。

1・身体的特徴・・・耳が長い。人間と比べて美系。500年以上生きる。

2・種族的特徴・・・神様達を信仰している。寿命が長いせいか基本、のんびりが多い。今は人間とは仲がいいが昔は悪かった。いいタイミングで魔物がやってこなければ正直危なかったらしい。

「エルフの国では伊予は危ないかもな。」

「なんですか?」

「ついこの前・・・といつても300年ほど前だが、エルフと人間は互いに憎み合つててしょっちゅう戦つてたんだよ。だからその頃の事を覚えてるエルフはいまだに人間が大嫌いだからな。エルフの国で暴漢とかに襲われても見て見ぬふり宿賃とか高くて当たり前。ということでエルフの国にいる間は俺かソラといっしょにいること。わかつたか？」

「はい。」

「じゃあ依頼の待ち合わせ場所に行こうか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540o/>

俺の世界：さらに一万年後

2010年11月25日10時36分発行